

2015年(平成27年)10月21日(水曜日)

山 館



思いを語る金高監督=館山コミセンで

「第21回安房地域母親大会」(同実行委員会主催)が10、11日、館山市コミユニティセンター第1集会室であった。ドキュメンタリー映画の上映と監督トークのほか、パネル展示やワークショップ、疎開体験者の話などもあり、多くの人が訪れ、それらの思いを深めていた。

大会スローガンは「女性と子どもの目から安房での戦争を見つめよう!」。両日とも午後に洋戦争末期を舞台にしたドキュメンタリー映画「疎開した40万冊の図書」

を上映、その後には金高監督のトークもあった。映画は、生きることが精いっぱいだった戦時下で、蔵書の疎開を決断し

た東京都立日比谷図書館の中田邦造館長や、危険な目に遭いながらも奥多摩などに本を運んだ高校生、疎開先で土蔵を提供

した村人らを描いた作品。この疎開で、濱沢馬琴の「南総里見八犬伝」

をはじめ40万冊の本が守られた。東日本大震災で被災した図書館の復興も描かれ、文化を守る大切さを訴える内容になつて

いる。

初日の10日には、会場を開め尽くす人数で初回開は初めて聞いた。文化

監督トークに感慨深く

**安房地域
母親大会**
来場者が平和に思い

を残すために命を懸けて本を守った人がいたことを知りました」などの感想が聞かれた。
安房地域の戦時中の資料を並べたパネル展示では、今年から鴨川市内の初めて4市町がそろつた資料を見て、平和について思いを巡させていた。

の上映会。上映後、金高監督は「インタビューが100%真実とは限らない。人によっていろいろな意見や解釈もある」など、ドキュメンタリーフィルム製作の難しさに触れた。「図書館は人を育て、考えを豊かにする場所。今は民間業者の介入など大きく転換している時期だが、いろんな本を読み、判断する自由がある場にすることが必要」「自分たちが住んでいるところの文化財を守っていくことが大事」などと語った。

見た人からは「人の疎

開は耳にするが、本の疎

開は初めて聞いた。文化